

代の神拜勤之、自分の拜禮も致し、儀式畢て重て玉泉院へ立歸り裝束相改め、德本院迄亥刻過歸着候。尤道筋坂中に榊原越中より、警固高提灯等出置候。於德本院御遷宮無滞相濟候趣、紙面相調町奉行へ相渡候。宿繼を以て及注進候。夫より致旅裝罷出候。舊例にて後段の饗應設之候。畢て發足江尻驛迄寅刻に引取候。二十三日辰刻彼驛致發出、二十七日致歸府候。

一、榊原越中は代々久能山邊領地に被下候。一二萬石計も收納の由。御宮の御守仕候。是は榊原氏本家の由。然共小平太家は本身故、自然と本家の様に罷成候躰に候。越中致參府候へば帝鑑の間詰同格の御會釋の由也。武職には榊原伸と有之。知行千八百石

一、玉泉院は東照宮御鎮座の頃より名水ありて至て冷水也。依て玉泉と號す。此度試飲仕候。

一、久能山は至て要害の地と相見え候。坂中に舛形門を設て、出入を切手を以て相改通し候事、尤成事と存候。道險しくても運送の便も宜敷見え候。若し致籠城候はゞ兵糧攻は格別に候、攻戦のみにては中々五年三年にても、可叶とは不

存候。既往年丸橋忠彌逆謀の時、久能山へ籠城の圖り仕候由申傳候。か様の事にて坂中にて、嚴重に往來の人を改られ候哉と存候。

一、右の序に物語有之候。若此度承候事に候はゞ、中々各へも難咄候得共、往年の事に候候、珍敷事可申候。横田備中守入道閑休常々心安申通候故、或時申聞候は、御年わか候へば久能山などへも、御越も可有之候。老人が物語御聞置可被成候。當時は老中にも被存知候方は有之間敷候。東照宮日光山にては南面に被建候。是は江府へ被向候。久能山御宮は西面に被建候由。此度も御宮は何方へ向候哉と被尋老中も有之候。西面に御座候と迄答申候。然ば不被存知事と察候。是は深き思召有之、東照宮御遺命の由にて、三年御鎮座有之候。御敵は西の方也。彼方を可被守との御事にて、御神體は麻上下を召し、菖蒲卷の御腰物を被帶、左の御膝を被立、御柄に手を被爲掛、怒氣を被含候御形像也。

某申候は、御西面の事、西國の方御敵と申故にても有之間敷候。我國を窺候外國は、皆西南の方に御座候。其上山城に天子被成御座候事に候。東照宮御一生、殊の外朝廷を御尊崇被成候。左候へば旁西を御後には不被遊詣と存候旨申候處、尤成心付

と被仰聞候。

斯に一事御靈驗とも可稱怪有之事あり。嶋原一揆の時天草四郎思ひの外手強く、板倉内膳正討手に被向候跡も不見、重て松平伊豆守被遣候。其年の元朝卯刻、如恒例三本立神供を、德本院の別當捧之候處、忽其神供に生血灑ぎかゝり候。別當大に驚き轉倒いたし候。其時の榊原越中致祇候有之、德本院へ申聞候は、是は可恐悦事也、敢て驚動する事に非すと云。德本院其故を問ふ。越中云。今嶋原の一揆等手強く奉敵に付、伊豆守を重て被遣候。然にはや以神靈御退治被成候。吉兆かと存候旨を云。果して四郎が伏誅、元朝卯の刻於城内逐自滅候旨注進來と也。此事横田閑休潜在被申聞候。閑休は松雲公御在世、御大目付横田備中守隱居名にて、此事今の老中松平右京大夫殿には、存知の事も可有之様に存候旨。

一、往年右京大夫殿、京都へ御使に被遣候節、久能山御宮へ裝束にて登山有之旨。六十有餘歳にて其壯健無比類事共に付、于今所の者共申傳候。箱根山の峠も歩行にて候。是に付世には健なる者も有之事に候。一谷八幡宮の近邊に居

候大野要人と云浪人、神道者にて拙宅へも罷越候。年來四十有餘に候。先年西國の神社を順禮し候に、往來草履にて罷越候。當地にては芝神明の社へ、千日參詣を存立候に、毎日丑時に致社參未明に罷歸候事、三年の内一日も無懈怠、且愛宕へ一日に百度坂を往還し七日相繼、七百度致參詣候。無偽證據には其邊の茶店の者共、見覺罷在候。彼七百度參詣の人と申候由。かゝる健なる者も有之事に候。二十八日信州君の話、高昌善大夫申合兩人承之記置候。

一、戸田城州深慮の事

或時御申候は元祿年中和州宇多城主三五織田伊豆守殿、於在所少不行狀の事にて候哉、家老の内諫言を申候處、心に障り候か其家老を手討に被仕候。扱自分にも非分とも被存候哉、髻を被拂候。此事江府へ申來一類中參會、其分に難成事故、委細可及言上とて數日僉議有之。口上書に相調、同姓の内織田能登守、同主計兩人、老中戸田山城守殿へ被罷越用人呼出し、右の趣演述候て、委細は紙面に相調致持參候旨にて被相渡候。用人請取山城守殿へ直々申述、口上書指上候處、山城守以外の外立腹、用人を睨被申、うつけもの、